霰の窓

「霰の窓」といふ題は編者のつけたものである。雜記帳のあちこちに書きつけてあつたのを纒めたもので、「孤囚漫筆」の最初にある「碧雲暗雲」の續きと云つてもいいものである。

——編　者——

大正十五年五月

地響きて運動場の足踏みの聞えつ窓を燕とぶなり

太陽の光り波だて乙鳥の歌ふ朝なり床板を拭く

心いま眠覺めの窓の燕の聲を抱きて機嫌鳴くなり

燕の尾振り首振り歌ふとき默る雀の淋しくもあるか

六月

憶亡友（二首）

梅雨寒く爪を切りつゝ憶ひ出でぬ囚屋に逝きし友とありし日

土色の爪を手にぎり年々の梅雨は病臥す男なりしか

朝空の雲の邊りを旅鳥の三つ飛び行くが遙かに淋し

かゝる朝は青き松葉のはら〳〵と旅行く人の心にぞ散れ

夕闇に蚊の聲澄めば小穴よりぽとんと落つる塵紙二枚

七月

水桶の垢落さばやくろくもを覗く白雲朝焼けて見ゆ

うまゐせしあさけ心を大空に舞ひ飛ぶ鳩は見れど飽かなく

炎天を流る油の一と滴たれてや光るかたばみの花

かたばみの花醉ひにけり拠々と營む蟻の汗の光りに

八月

軒高くあきつの羽根の飴色に濡れて輝く夕となりぬ

十月

音信のなどかも遲き菜畑に今日はしぐれの水の溜りつ

日毎ふる霰に冬を覺えども夜半すむ月は秋にぞありける

十一月

遠つ海鳴るときゝあえず冬荒の怒り男の風吹き襲ひけり

厚壁に怒濤とくだく冬荒の風きき居れば力湧きくも

冬の夜の三ヶ月奇しく冴えにけり切られお宮の芝居戀しく

山茶花の戀しくもあれなひも足袋の赤きを穿けば窓に日の影

雪寒むき廊下を急ぐ喜びのあの足音は湯あみならむか

雪暗き廊下の果のセメントの湯槽三尺我れ
獨り浴む

昭和二年一月

みぞれつゝお婆鴉のたゞ一つ啼き渡りけり
佗しと思ふに

霜やけの油塗る手にうすこがね冬の日ざし
のもれそゝぐなる

霜やけの油い塗りて愛しさの手ゆびを撫づ
る愛しき手ゆび

乾燥を乞ひし布團にくるまれば枯木のけむ
る匂ひこもれり

吾が心沈むな病むな雪水のにじみて暗き壁
ぐま見るな

吹き込みし雪の凍りて床板に有明の灯のう
つろひにけり

この男からだ懶くけだものの如くに耳はす
るどくなりけり

日のみ神温ためたまへこの男まなこ冷めた
く耳尖りたり

やすらかな軒の雀の寢息をば心にきゝつ寢
なと思へども

入定のまなざしに肖て雪凍る窓の硝子を日影透れり

雪凍る硝子戸の外の明るみも閉かなるらし雀啼き居り

窓のそと雪掻く人の聲にだに孤獨の胸は血しほおどらゆ

分折の爪よ動くなあたゝかく觸れくるものを掻くなこわすな

二月

獄死せし我が子の屍掘りいでて母はかい抱き泣きしとか吹雪

窓硝子凍れる息の繪模様は我が妄想のおどる姿か

息凍る窓の硝子の繪模様のいづちけゆきし日影笑へる

橇馬車の箱にくゞもりみちのくの雪の秋田を馳せ曳かれ行く

雪を蹴るそり馬車にしてシベリアの流刑人をふと思ひけり

この國の子等は可愛し雪まみれ遊べる頰のくれないの色

紅の美頬の乙女は新藁の雪沓はきて笑まひ
立てるも

藁沓の丹頬の乙女よゴム靴はつめたくわろ
しとばに穿きそね

裏日本寂しき町の雪中に血にまみれたる魚
ひさぐ見ゆ

三月

亡父を偲ふ（四首）

やるせなき情けの涙世の義理の淨瑠璃語る
父なりしかな

祖母さまへ父が手向けの御詠歌の淨瑠璃ぶ
しを母と笑ひし

佛飯を與ふ雀にしたしみのもの言ひ給ふ父
なりしかな

十三の文珠詣りに西京の嵯峨野の花を父と
見てしか

曙の紫深き中よりもあらはれいづるよべの
淡雪

高く舞ひて眼するどき鳶よりも庭の雀の親
しくなりけり

孤り舞へる鳶の眼のわけしさを泪に戀ひし
我れなりしかど

四月

雨ゆるき窓見てあればまぼろしの芹生の沼のふと匂ひけり

教誨の座に出づる我が姿を
よりたまる着物の裾の綿の球足に蹴りつゝ行くがおかしも

黄に霞む春の月影殘りけり含み聲なる寢起き雀に

時ありて雀にまじりちろちろと寂しく啼くは何鳥ならむ

さみしらに啼ける鳥かもあまつ空たゞよふ春の光あみつゝ

松の芽の白く正しく生ひいでてしみらなる葉を今日しぬぎけり

五月

いや待ちし乙鳥來にけり獨り居のわが窓ぬちを覗きくれけり

囀れる乙鳥の羽根のゆれゆるゝ紫紺の色は
美しきかな

たまきはる命は聲に轉ひ出で歌へる乙鳥う
らやましもよ

幽々と鳶吹き鳴らす笛の音に乳白雲のあま
ながるかも

春光に泛きたゞよへる白雲のしづしづし づ
と流る寂しさ

うごかねば動けばさみし白雲の色にも春は
深まさりけれ

みちのくの春の鳶笛のどかなり夷蝦が謠は
いまありやなしや

雀どち灯をともさずやゆく春の宵の庭なる
ろうそく草に

青塗りのたん壺立てる庭みれば痩せしつつ
ぢに花三つあり

日出を戀ふる歌（三首）

青波のよせうつ國に生れたる身にしあれば
か日の出戀しも

あくがれぬ男鹿岬の荒浪にこがねうつろひ
あまのぼる旭を

いのちあらば男鹿岬の荒浪にうつろひのぼ
る朝日拜まむ

七日目に病床をあげて

めもたゆにすぎゆく春を眺めつゝわれ病み
てけりそれのなく日を

いづちより訪ひけむ風ぞ病起のあしたうれ
しく匂ふ若葉は

運動場にて（二首）

初夏の空鳴り渡る飛行機を仰ぐも憂しや病
み疲れたれば

飛行機は雲に沒しぬ毘沙門の若葉しづかに
風渡りけり

六月

路中にぽつねむとしてひともとのぺんぺん
草の咲き立てるかも

毘沙門の宮の青葉の上に見る白雲の空さら
に靜けし

片照れる青葉のほとりさやけしと鳥啼きわ
たるいゆきかへらひ

休み日の未明に覺めておち方の杜にい鳴け
るふゝどりをきく

ふゝ鳴いてけさ靄深しいねがては三日月赤
く拜みたりける

我が手桶み山清水の滿ちなばと想ひつ嗽ぐ
ふゝどりの音に

郭公と鳴く鳥きけば樹々青む頃の淋しさせ
ちに知らるも

眞夜中にふと眼のさめてなにげなく顔を撫
づれば脂泛けるも

しぬびつゝ窓を開きてぬばたまのさつきの
闇に眺め入りけり

夜の雲の下りてや流るぬばたまのさつきの
眞闇濡れて動くも

運動場にて（六首）

三四本こぼれて生えしあぶら菜の花の盛り
に會ひにけるかも

思はざる此の樂しみに遇ふものかふゝ鳥の
聲あぶら菜の花

薄墨のまだらはあれどこれやこの今年初め
て見つる黄蜂

植えられし躑躅は咲かでこぼれ生ゆ玉菜の
花にあふが尊さ

あぶら菜の花のほかなる庭草をかきかぞふ
れば五いろの花

あぶら菜の花より出でゝ六月の空のもなか
へ消えてゆく蜂

くわつこうと鳴く鳥の音に白みけりけふの
一日も靜かに消えなむ

いづくより渡り來にけむ郭公鳥心やすくば
いつまでも居よ

みちのくのひとやの窓に鳴どりをきくがた
ぬしも木綿織りがてに

夏の靄深く閉ぢけり木綿織れば藍の香りの
濡れてたゆたふ

郭公鳥いなける杜は木立さび青葉深しとき
きつれぬばゆ

窓日影あから淋しもおちかたの庭の青桐か
げを見せに來ね

靑桐の影戀ひ居れば機の上を燕のかげのふ
とすぎにけり

天津風か吹きかくふき蒼空に薄雲眞綿ひき
のばしけむ

病臥

梅雨の靄深くこめつゝ薄あかね夕となりぬ
目醒てみれば

七月

かたばみの花咲く砂利もくろがねの窓も旱
れりけしく閉けく

日に燒くる砂利の中なるかたばみの花の光
に眼そむけつ

茄子畑につとぬき出でし一穗草あきつは愛でゝ今日もとまれる

雨晴れし雲間に深き秋空へ聲も透れとせきれいの啼く

九月

秋の風さやけからずやくろがねの窓にも馴れて麥飯の味

麥飯の大塊りを秋風につきこぼつなり眞白木の箸

箒木の邊り小暗くえぞ菊のあたり明るく三日ふる雨

髯剃ると顏に塗らるゝ石鹼のいや臭きかも秋の雨ふる

はぢ割れし畑の茄子の腸に泌みて滴たる秋の雨はも

十月

地の球に身はのせられて極みなき大氣の中を我れ漂へり

十一月

冬に入る日向の壁に蠅二疋とんぼ三疋ひた
と止まれり

木枯に亂れ亂れつ一群の朝の鴉の飛び進む
かも

北の海に荒浪たゝせ潮捲き眞砂を捲ける風
吹き來る

北の風防ぐ板戸に吹き當りて落ち溜りたる
は何處の砂ぞ

北くにの風ときけども暴れ風ときけども今
日のたゞならぬ風

嚴なすいかつ獄屋もしかすがにこの暴風に
堪えでゆらぐも

灯もいまは消えはてぬ鐵窓を打つは霰かさ
ざれ石かも

外にでれば塵のからだは一吹きに虚空の果
てにけし吹き飛ばむ

此の風に吹き飛ばされて飛び碎け虚空の果
てに飛び散らむかも

十二月

霜けむる天つ避雷の金染めて朝日の光り細
く流るも

花蜂とまがふ大蠅我が部屋に響かひ飛べり
よき冬なれば

冬なれど晴れて雲なし我が窓に負向きたる
日を迎へおろがむ

だぶ〳〵と汲みそゝがるゝ一碗の茶の湯に
照れる冬日影かな

あたゝかな冬たまはりぬ遠つ國老ひませる
母も日を浴みまさね

南椽の冬の日向にいでまさむ老ひませる母
吾を憶ひまさむ

夢さめてくゝと笑ひぬ獨房の冬の夜深くく
ゝと笑ひぬ

冬の夜の風が言ふなりふと覺めし夢の行衛
は知れぬ知れぬと

愚かなる身には夢路のくさぐさのたわいな
きこそ嬉しかりけれ

淋しさの底より湧きし溜なみだやがて冷め
たくなりにけるかも

積雪一尺、冬らしくなりぬ

灯の光奇しく明るし雪水は窓のすき間を溢
れ垂りつゝ

女子師範の丸山教頭の講話あり。挿話の中に、近
江聖人中江藤樹と追剝との問答ありしを興ふかく
聞きぬ。（二首）

追剝と中江藤樹の問答をきゝつゝ膝を突き
合へる人

うつむきて膝つき合へる彼の人等强盜なら
む小さき恥らひ

寒むき夜の慓ふがまゝに手慓えつ書きにし
文字はおかしくもあるか

裳の裾の垂りて餘るをおのこなる我れ折り
縫へば外へぞ折りつる

讀み終えぬ都の便り手にぎりつともしび消
えし雪荒を聽く

また誰か狂ひゆくらしくろがねの窓の吹雪
のひと日ひと日を

寂しさに狂へる人をあざ笑ふ同じ囚徒の悲
しくもあるか

路
汁

「蕗汁」といふ題は編者がつけたものである。

秋田での俳句は此のほかにもあるが、それ等は「孤囚漫筆」及び書簡集「秋田から」に載せて置いたから、重複を避けてこゝには省いた。

――編者――

大正十五年五月

さみだれ（二句）

煉瓦塀にきゆくつな草のさみだるゝ

燕よりも雀よりも鳩のさみだるゝ

六月

眠むき眼覺に

曇る庭の三味草花は起きたやら

雨暗き房に香のない蕗の汁

句一念蕗汁の香のほのかなる

朝涼（五句）

夢もなく自づと覺めて雲涼し
朝の雲涼し散り來る蚊は靑く
燒けながら雲濡れてあり朝の月
蓮の葉の露のよに涼し今朝の月
雲涼し戀ふれば蓮の匂ひきて

中央の作り芝生に、茨の花と燕子花との咲きゐたり。茨は紅白、燕子は紫白、共に前夜の雨を湛へて、松下に微風をはらみつ。（二句）

茨の花に芝生に湛ゆ夕べの雨
燕子花我が編笠は艶ならず

蚤（二句）

蚤光る床のすき間や日の匂ひ
蚤の國蠻女いささか黃なりけり

七月

ガラス筆洗ふや淡き夏の夜の
巢の蜘蛛よ我が吊る蚊帳を何んと見る
蚊帳吊つて四圍の壁見ぬやすゐ哉

八月

炎天や蜂かもついと閃めきし

糸屑に埋れて赤い團扇哉
雲の峯せめて龍飛の浪響け

曉雲送涼風　電線迎燕子

燕の子とべ〳〵風が尻を吹く
天の海の浮島雲や渡り鳥
やれ踏んだ團扇よ秋の骨の音

九月

歸燕子を見送り顏や屋根の鳩
燕去りし朝や雀のものがたり
お、野分！　野分!!　悲壯なるマーチよ……

鴉潜み鳶鬪へる野分哉
鬼城赤く蟠りけり秋の空

偶感

秋澄めり我れ白眼のなほ失せで
鳩ゆるく飛んで秋澄む羽音かな
秋の風會々庭を驅けみるや
體操の汗拭いて蟲に獨り寢る
秋風や飯をほごせば麥の蟲
雲越しに白光させり秋蛙
秋風に濡れて來る蚊の泥黑な
生水を藥餌となしつ蟲の秋
秋の蝶とひそやかに歩む晝の月

朝寒むや湯桶にひたと止る蠅

十月

混々と湧く水想ふ夜長かな

秋晴嬉心

赤蜻蛉さぞ繩網をすく人も

自棄聲でぶんと一飛び秋の蠅

粉になつて秋が散る〳〵赤蜻蛉

老いて眠い煉瓦塀かや赤蜻蛉

身に泌むや旭に透く蔦の破れ翼

今朝なきし蛙や何處に霙るらむ

葉牡丹に焦茶雀の冬となり

支那南瓜まつ黄な汁も小春にて

即景

蒼穹へ菊をさゝげて笑める僧

菜畑の霙る彼方は病舎かな

鳩三羽病舎の屋根に霙れけり

十一月

病まじとて踏むや地肌の風光り

眼鏡つめたき霰の後の空あをみ

こよなき不孝の、今日は老ひ給へる母が姿を思

ひ浮べつ。

手の皺の炭の粉寒う在すらん

冬崩の草を觀てまた機に上る

機織れば指に小春の色が染む

古さうな囚人を日ざす枯芝と

木枯や水汲むでくる下駄の音

警笛を吹き習ふらし霜の朝

冬の雷止んで冴え飛ぶ鴉かな

心水のゆらぎてやまぬ寒さ哉

指の爪職歪みして日短かき

衿垢の光りも寒し冬の雁

十二月

吹雪く日や覗き窓から教誨師

命ちの窓で闇がさゝやく散る雪が

うまいせん雪降る暗に包まれて

ともし火の清淨を見つむ耳に雪

雪晴れて夜の青さに驚けり

ふと鳴いた懐中の湯たんぽも淋し

教誨堂

我れ獨り離れて坐る寒さかな

十一ヶ月廿四日間の大正十五年、續いて七日間

の昭和元年の、今將に終らんとして雨しきり也

屋根の雪の轟き落ち つ行く年や

昭和二年一月

屋根に迷ひ猫啼く、日影薄し

壁住みの鈍い男や冬日影

獨り居の窓にて冬の雲深し

風邪引きて熱あり

風邪の眼やぬくい泪に灯の映えて

囚人と看守の縁や雪荒るゝ

寒水多功德　味亦靈妙也

寒水や頭に泌みる飲みこゝを

二月

雪荒るゝ聲の向ふは世間哉

ふところの湯たんぽが多の風が泣く

マコちやん!!　キミちやん!!

冬の風空耳もがなと思ひけり

冬の孤獨の耳底に澄むは何

彼方の房に「ぶた」となん呼ばるゝ暴れ男住みけり

拗ねたりな着物の綿も隅つこへ

月の色、やゝ黄色く霞み初めぬ。野良猫の鳴く音きこゆ。地は雪を敷けど、何處やらに春の色匂へり。

月はやゝ朧になりぬ猫の息
雪かけて炭火を消せば啼く鴉
家裏は淋しきものを多の川
樹に風や囚車は雪を辷り行く
白雪、霏々粉々。中々に寒し。
唖々と啼く聲は中空雪の中
水鼻や凍傷や唖々と啼く鴉
病臥（二句）
うつらうつら瞼に近き春の雲

三月

春雪や刺り傷の血の美しき
我が窓は春告鳥も雀にて
やゝ體熱あり、春の月朧々として頭重く、狂想しきりに湧きぬ
朧夜の奇しき病や蝶の毒
哀れ吾が手指の凍傷の跡、御笑ひ候へや、春の女神
春の日にかざせし指の醜くさよ
殘る雪尻目に蚤をとり得たり

東風吹くや樟腦匂ふ墨の汁
汚れ足袋草崩ゆ雨に憐みぬ

四月

凍傷の古皮めくくる暖かさ

自讃

暖かに鼻から外へ出た毛哉
床板の年輪數うる日永哉
春雨に濡れたる砂利の干色哉
下崩やゆつたり土を踏むこゝろ
落ちて見たし潦から春空へ

蛩の子に長閑な面を蹴られけり

庭の畑打つ音聞ゆ（二句）

淋しさうに打たるゝ畑打てる人
畑打つ音にも君が淋しきは
遲き日を蕪村のホ句に醉ふてあり
灯つたに雀も寢たよ畑打ちよ
日の色や草履に匂ふ春の苔

金牛和尚

飯桶を抱えて舞ふや春の風

大海禪師

御顏も霞の色や松の花
鳩やぬるゝ寢覺の雨の春を聽く

若草や珊瑚のやうな鳩の足

僧問大龍、色身敗壞、如何是堅固法身。龍曰、山花開似錦、澗水湛如藍。

春空やたゞ無量光無凝慈光

窓日影やすし日永の第二年

春宵や濃きよりたるゝ星の糸

囀りや膳の茹で菜も花のまゝ

鳩も皆出拂ひにけりな晝霞

日永くなれり、學房子の早仕舞ひて歸りくる頃は猶明るし

囀りや學房囚の夕機嫌

暖かや小鳥に糞をかけられて

五月

天人よ暮春の鶯の鳴く時は

編笠を三味線草に預けけり

行く春のぺんぺん草を鳴らさばや

雲よ躍れつゝぢは枯れて花三つ

昨夜大雨、初雷を聽く

初雷や晴れて燕の赤い頰

行く春や囚衣は赤く夜着青く

げぢ〳〵と二人で聽くや五月雨

五月雨や此の綿入で七ヶ月

蕗汁やあたり病臥す人多き

蕗汁やお膳のそばの藥瓶

六月

梅雨曇る空やしきりに鵙の聲

機馴れぬ足の痛さよ梅雨の鵙

さつき晴、蜻蛉出づ。

紫に煙たちのぼる薄暑かな

夜の梅雨や布團へ投げるむくみ足

玻璃窓や外の雨粒なかの蠅

入浴に行く。浴場の横の廣場に作られた箒草が

淸々と伸び立つて來た

さみだれや作り放しの箒草

入浴からいゝ氣持になつて歸つて來ると、丁度雨も晴れた。やがて夕飯で、冷奴。

冷奴水繪の空となりにけり

寢起きの眠むたさに

睡り魔の逃げまどふらし夏の靄

朝燒の高音や鷄も郭公も

犬蓼の狂ひ咲きありさつき晴

短夜や夢ちぎれ雲ちぎれ雲

六月や我は愛する朝の雲

蚤の痕涼しく撫づる朝の雲

夜も更けぬ書上を飛びし蚤の音

七月

燕の子教誨の座に飛入りぬ

親や遠き雲を眺むる燕の子

明易き頃を雀の寢言哉

暑き日や眺むるものに臍の垢

蟬なくや殘飯桶を運びゆく

汗たるゝ男盛りの臭ひかな

山見たし窓に羽蟻の飛べる日は

行水の戀しき屋根の鶺鴒に

朝風や茄子の花落つ濡れ畑

炎暑寂々

日の盛り閑に箕を嚙む馬もがな

去年の蚊の枯ぶも暑し本のあひ

鶺鴒の高音に暮るゝ白雨哉

ホ句の味胡瓜の味の嬉しさよ

蟬鳴くやお八ツの鹽茶紅團扇

蝙蝠やしきりに隱くる利鎌月

金泥の三ケ月にぶし蚊喰鳥

雲の幕引いてしまひぬ戀の星

誰れやらが鳴呼ともしらぬ遠花火

秋旱褐色の蝶舞上る

親しさや蚊帳に來て鳴く秋の蟲
向き〳〵に茄子の天窓や渡り鳥
秋の蟬尻から蟻につゝかるゝ
秋の蟬鳴きなむとして止みぬらし
初嵐大きな鳶に驚きぬ

九月

秋涼し西の窓より朝日影
けふ歸る燕もあらむ畫花火
秋晴や雲に映れる雲の影
去ぬ燕春また來るはどの子かな

雨に鳴く蟲や花火の夜は明けて
秋雨や花咲く素枯る箒草
狐茸よべの無月に生れけり
秋風に唐金のよな蛙かな
藁ごみは蟻にてありしよ秋の風

明け方、小便に起きて、思ひがけなく雲間の玉兎を見る。

月見れど悲しくもなき淋しさよ
樣々の鳥鳴き渡る夜長かな
よくきけば房の内にも蟲の鳴く

悼芥川君

地の下で蟲の鳴く音をきかるゝか

獄底やおどろ秋蜩干し埋む
夕燒やあんな高さを飛ぶ蜻蛉
石ころも疲れ色なり赤蜻蛉
砂利の下を我世ぞと思ふ晝の蟲

理髮夫君に

剃刀を芋の葉露にすゝがばや

十月

夜長さや晝をあざむく白い雲
庇から垂るゝ巢藁やとんぼ晴
想はずてあれば眠むたし赤蜻蛉

地を踏めば地に響きあり渡り鳥
鷺飛んで夜長の闇を呟きぬ
蜻蛉や庭這ふ草も莖赤に

初霰（二句）

窓に入る霰を拾ひ甜めてみし
見て居るや霰消えゆく掌
晝の月へ舞上りけり秋の蝶
亂れ雁嬉々哀々と渡りけり
淋しさを知るや雁金の睦まじや
末枯や茄子は花を執しつゝ
草の實や雀にもこんな尖り顏
この心雁十文字に渡るなる

想ふ事も遙かなる身に雁遠し
過ぎけるは紙片か蝶か秋の聲
そぞろ寒む雀と頰を觸れたけれ
編笠を脱いで蜻蛉に與へけり
秋はもうほんのかげろふ蜻蛉哉
來ぬ筈の手紙またるゝ秋の暮
箒草は箒となりぬ風の音

十一月

もろともに雀も散るや木の葉風
時雨けむ木の葉もまじる漬菜哉

冬に入る星の息吹やかすれ雲
手を擦ればかさ〳〵落葉かさ〳〵
あの蜻蛉こよひや果てむほろしぐれ
鳶去りし冬空のぞく雀かな
木枯や夜雀襲ふ屋根の猫
綿入や骨に泌みくる日のぬくみ
鳩殿に雀よりそふ寒さかな
しぐるゝや膳に引き添ふ手桶の湯
冬の蠅いと嚴かに在しけり
棚に置く塵紙二枚冬の蠅
木枯となりゆく迷ひ鴉哉
木枯や突き傷の血の溢れくる

汚れ雲霙れて暮れてしまひけり
からだ中に日を浴びてゐる多木哉
靜けさを日影の泌みる多木哉
冬鴉天邊の聲は聽くに堪ゆ
寒むき耳ほれば砂搔く響あり

十二月

霜の松の尖端が見ゆる煉瓦塀
霜の菜のくつきりと晴れて習字哉
墨の香を離れてしばし冬草に
日の下に土黑く霜の青菜濃く

冴ゆる夜や銀河の如き雲滿る
かなまどの下の石ころと枯蹶躅
踏む土のそこゝの小さき冬萠や
冬雲の穴より見ゆや日照り雲
油滴らす朱肉に冴ゆる灯影哉
磨る墨のしきりに冴ゆる氷雨哉
粉な雪の止みなむとして隅青し

湯たんぽ、凍傷膏を給せらる

三日分の凍傷膏やかんな屑
ぬくみある湯姿に頰を觸るゝ哉
吹き來り吹き去る風に掃く煤や

課題獨吟を試む

冬木（五句）

高い股に青草見ゆる多木哉

雀壺桑よりも桃の多枝に

見るかぎり冬の瘤桑や土塊や

野のおちこち牧柵をなす多木哉

この家の人かたくなや冬瘤木

課題　火事（七句）

火事多し夜風に飛べる鉋屑

遠火事やほのかに見ゆる老古木

火事跡や心和らぐ池の鳥

お宮火事鴉の塒照しけり

火事の煤掃いて水仙活けにけり

啼く千鳥あれ〳〵沖に船火事が

舞ふ雪や火事を逃げくる廓女

辭世

もろもろの惱みも消ゆる雪の風

久太句屑

これは、僕の古くからの句を思ひ出して書き止めたものなのだが、馬鹿に少ない。も少し氣の利いた句もあつたと思ふのだが、どうも思ひ出せない。然し、思ひ出せないほどのものならどうせ拵えもの丶駄句のみだつたに違ひなく、深い實感から流れ出して作つた句は殆んどなかつたからなのだらうと思はれ、淋しい苦笑が湧いて來る。

春

明治四十二年頃

春淺き揚げ藻に光るもろこかな

大正元年頃

一坐あちらこちらの溫む水に向く

敦盛塚（大正二年頃）

しやくなげの花薄暗く拜みけり

大正五年頃

馬は暖かに尿す銀座の柳かな

夏

明治卅八年頃

初蟬や草の匂ひに木の匂ひ

明治四十一年頃

人食ひを聞ひて散る子や蚊喰鳥

みみず湧けば南瓜肥ゆると蚊遣かな

明治四十四年頃

柴陽花に雨が降るなり光琳忌

大正五年頃

金魚摑み殺したる性慾の惱み

浴衣褪せて日中を夢のよな男

大正十年頃

蟬なくや旅は琉球の脂味噌

秋

明治四十一年頃

ぐみ荒れの舌の痛さよ鵙の聲

明治四十一年頃

磯臭さな蟹が裾這ふ秋の蜩

明治四十三年頃

隱れ住む手折れ角力や鵙の聲

大正元年頃

松の葉の苦がきを嚙みつ鵙の晴

人を送る花火の煙り雲と飛ぶ

大正二年頃

その荒壁の主じ鷄頭節くれて

冬

明治三十九年頃

恐ろしき浪の音きく炬燵かな

大正元年頃

榾の灰ねむたし枇杷の花に鳥

莖石に文字ありと避寒人の見て

冬の夜の白足袋白う參じけり

獄中吟——大正七八年

床板に寒光すものやこぼれ鹽

冬旦の天深か深かと泳ぐ鳥

雜

大正五年頃

俺が脂も浸めよと銅貨握りたる

煙管のやにの流るるがままに老ひしなれ
筆の軸を嚙み割る我の癖は悲し

略歴

明治二十六年 二月六日(屆出五月一日) 兵庫縣明石郡明石町之内大明石村字東片端に出生。父久右衞門五十四歳、母つゆ四十歳、義姉しげ(異母)九歳、祖母しか七十二歳、の五人家族にて、父が明石町某生魚問屋に帳場を勤め、漸く一家をささゆ。月給七八圓なりと聞く。

明治二十八年(三歳) 二月、弟從藏生る。(但し三歳の時、親戚阪本龜藏方に養子となり、現在姫路市にあり)。この秋、頭部に惡性の腫物密生し死に瀕す。現在後頭左部に凹みし大禿あるは其時の遺物なり。(前年、大明石村大手町に移轉)

明治三十三年(八歳) 明石第一尋常小學校入學。爾後四年卒業までの間、續いて副級長をつとむ。

明治三十七年(十二歳) 四月、明石高等小學校へ入學。六月、肋膜及び眼病に罹り休校、そのまゝ遂に退學す。この時、義姉しげと義兄竹治郎(異父也)との間に婚約成り、一家を構えて今立家(親戚にて後嗣絶え居たりしもの)を起す。即ち今、姫路市福山町に住し母つゆ共にあ

り。下駄職にて至つて貧也。（註、父母は晩婚にて、共に先夫先婦間に子供多くあり、されど行衞不明の者、或は他家を嗣げる者のみにて、この父母の老後を見る可きもの、僕及び今立家夫婦の他になし）

同じ頃、家を同町之内東本町濱通りに移し、母は煙草及び小量の下駄などを商ひ始む。僕は退學後しばらく兄の許に下駄職を見習ひしが、十一月、父の遠緣に當る大阪東區北濱一丁目木田元三郎（有價證券賣買業）方に丁稚見習として預けられ子守などささる。

明治三十八年（十三歳）　一月、木田の紹介にて同町株式仲買人阪崎藤兵衞（後に高橋安治郎商店と改稱）方に丁稚となる。夜は愛日實業補習學校に通ひ、爾後、凡そ三ヶ年間學ぶ。店員某を師とし、俳句を學び初めて錦江と號す。

明治四十年（十五歳）　木田元三郎より相談あり、同年冬、高橋方を强ひて暇取り、木田の店員となる。木田は家庭大いに紊亂し、且つ主人は刑餘の身なりしかば、店も一向に信用なし。殆んど詐欺に類する行爲にて店を支ゆ。事情かくの如くなれば、僕、早くも惡事、遊蕩を覺え翌年十六歳の秋、猛烈なる淋疾及び梅毒に惱みたり。其後今日に至るまで、この病ひ或る時は猛り或る時は衰へつ、竟に癒ゆることなし。

俳句の熱いよ〳〵上り、知名の人々にも接し運座にも連る。號を醉蜂と改め、專ら碧梧桐に心醉す。

明治四十二年（十七歳）　六月、木田より轉じて同町内の株式仲買店尼崎愛藏商店に勤む。元服して久七と名乘る。此處に四十四年の秋まで働きしが、その間、政治、思想等に關する興味大いに起り、演說會講演會などに熱し始めたり。且つ、店員に永尾眞一郎といふ人あり、この人尾崎行雄の周圍の人々と交厚く、又、往年北海道に在つて社會主義者西川光二郎一行と共に演說せし事などを話す。當時、この人との接觸によりて、政治、思想、方面の感化を多少受けたり。但し、この時はまだ社會主義の內容に就いては少しも知らず。

明治四十四年（十九歳）　この年の秋、事情ありて、支配人大谷力他四五名と共に尼崎商店を退く。而して大谷氏の再擧を待ちつつ同家に食客す。

大谷氏雜書を藏す。僕、暇にまかせて殆んど讀盡す。大谷氏、維新の政變に活躍せし人々の事を好んで論じ、殊に勝海舟を敬す。僕はむしろ自由黨の運動に興味を感じ、中江兆民を敬愛す。僕一日、兆民の遺筆『一年有半』及び『續一年有半』を求め讀む。編者を見れば怪しむべし逆徒幸德秋水なり。僕、これにはいたく愕きたり。續いて購ひし『兆民先生』の一書、之ま

た秋水の筆にして、然も彼れが、吾が敬愛する兆民門下の高足なる事をも知るに至れり。それ以後社會主義なるものの內容を知りたき念、甚だ强まりしと覺ゆ。

明治四十五年(二十歳) 一月、神戸に某現場師(謂ゆる合百師)を手傳ひ、三月初め歸阪(大谷氏方)せしが、その間、同地にて憲政擁護運動の群衆中に卷き込まれ、代議士小寺謙吉邸のぶつ壞しを見て、大いに血を跳らす。

五月、同人相語らひ俳句雜誌『紙衣』を發刊して俳壇に氣を吐く。然して之れ、僕の俳句に熱せし最後なりき。

大谷氏再擧の望みなければ、夏頃より株式の外交員となり、仲買店奧田淺治郎、馬場能職等に注文を取次ぎ、北區上福島三丁目に下宿す。然るに、七月に入つて馬場仲買店破產し、奧田仲買店又續いて支拂停止を告ぐ。爲めに客全部を失へり。加ふるに、友人某より借受けし公債若干、及び父を欺き生魚會社の權利株を賣らせて作りし金若干とを相場にて損失し、煙となし終る。慚愧やる方なし。殊に當時、積年の病毒の結果、强度の梅毒性神經衰弱に罹りて懦弱と自暴に陷り、竟に自殺を決して八月上旬船にて土佐に渡る。

高知の港にて上陸し、翌日南端宇佐に泊す。死所と定めし同所靑龍觀音の絕崖に立ちて死に得ず、夜、宿屋にて毛生液ナイスを仰ぎて遂げざりき。止むなく宿料の代に羽織等を脫ぎ、それより心に行き倒れを期しつつ北に向つて山路に分け入る。山畑をかすめ、水を掬みなどして三日目に伊豫の別子銅山に出づ。此處にてフト心變り、銅山雜夫を志願せしが容れられず、再び、漂泊を續く。その後、或は木樵小屋に、或は遍路宿に、或は農家に救けられ、時には人の軒端の積藁の上に乞食と共に寢などして、三島、觀音寺を經て讃岐丸龜に出ず。その夜、丸龜の町々をさまよひて人に怪しまれ、警察に一宿を乞ふて街路に投げ出され、感極りて港に走り出で入水せんとせしが、此所にても漁人に妨げられて死に得ず、夜明けたり。フト俳友靑城氏此地にあるを思ひ出し、風袋町に訪ぬ。此所にて大阪の知人俳友等に手紙を出して貰ひ、旅費など送られて、九月上旬無事大阪に歸る。

歸阪後、直ちに下宿を引拂ひ、暫く某印刷製本所の注文取りになりしが、十一月、神戸市榮町二丁目株式仲買店柏原重彌方に店員として住込む。されど一向に商賣には身入らず、古本などを漁りて雜書を耽讀す。

大正二年(二十一歳) 商賣不熱心により、二月柏原商店を解雇さる。餘暇ある勞働を望み同市相生橋際時事新報支局に配達夫となる。三月末、前記大谷氏突然配達所へ尋ね來り、「奧田商店の整理成り今後自分が經營する事になりたれば來り投ぜよ」と言はる。卽ち上阪して奧田商店に入り、追證簿を受持つ。四月、兵役檢査あり、丙種不合格。

五月頃より、又々神經衰弱の兆候著しくなり、妄想、自棄の變な狀態に陷り、五月末、漂然と京都に至り、何處ともなく歩き廻る。懷中持たねば、夜疲れて五條橋停留所にて寐居るところを五條警察署に引き行かれ浮浪罪に問はれしが、三日目に大阪へ送り返へされ釋放さる。奥田に歸へりしが其場より放逐され、西區境川に北尾新聞店支局の配達夫となる。此處にて、自分の生くべき道は眞面目なる勞働生活にて、決して浮薄なる株式界の生活にあらざる事を確く悟れり。

二ヶ月ほど經て、再び大谷氏より手紙あり、許すから歸れとなり。時に僕の心中既に一轉機を遂げ、株式界に戻るの心少しもなかりしが、その程より古本の露店を志して資金に困じ居たれば、それ等の準備金を蓄ふる爲めに、再びしばらく株式界に戻らんと決心なし、謝して奥田商店に戻る。かくて其の年一杯ここに勤め、その間に一切の準備を整へたれば、終に心底を大谷氏に打ちあけ、新春より新境地に入る事を得たり。この秋、新聞の廣告にて社會主義者堺利彦の編輯する『へちまの花』といふ雜誌の發刊を知り、直ちに申込みて讀み始む。即ち、此處に於いて、始めて僕と社會主義との接觸開かるるに至りし也。

大正三年（二十二歳）一月、同市福島の某家二階を借り、古本の夜店を出し始む。

此頃より愛讀誌『へちまの花』は堺氏の「小さき旗上」てふ一文を揚げて『新社會』と改題し、

大いに社會主義の說を主張し始む。その論鋒、現代社會の罪惡を鳴らして痛烈、社會組織の誤謬を指して適切なりしかば、一句々々讀む毎に眼輝き血熱すの思ひありたり。堺氏の『賣文集』『社會主義倫理學』などを讀み始めしも此頃なりと覺ゆ。かくて僕の精神一度び社會主義の眞理に照らさるるや、機向更に轉進して眼界曠々たり。僕遂に、この運動に一生を捧げんと思ひ立ちたれど、又省みれば國には老ひたる兩親の僕の成功を待つあり、且つ恐ろしき苦鬪の途のよく僕の如き弱き人間に堪え得べしやなどと思ひ惑ひて、商ひを餘所に悶々の日のみ續くに至りたり。やがてはそれが例の神經衰弱的兆候を呼び起し、前途濛々となり自棄に變じ、三月末一切を賣り拂つて遊蕩に費ひ果し、又々漂然として放浪の旅に出でゝ夕方有馬郡三田に着く。此所にて鐵道線路に飛込まんとして果さず、同夜、三田警察署に自ら爲さざる罪を名乘つて出で狂人として拘留さる。四五日經て國元より老父來り連れ歸る。歸宅するまで、父は僕を發狂せしものとのみ信じ居たりし樣子なりし。

歸鄕後、社會主義の事など一切忘れはたし、ただ〳〵平々凡々に生活して親の下に侍して生活さんと決心なし、一心に所々働き口を求めしが、更になし。夏過ぎ、秋になつて未だなし。しかも母親は、親戚なり世間なりに對する見榮、意地强くして（生活は赤貧なるに）僕をして俥夫人夫の如き勞働を許さず、外出には羽織を着ざれば怒るといふ風也。この母の氣持を酌んで悲しく、且つ赤貧の見るに堪え難ければ、終に又決心を飜して、十月上阪し、舊知なる境川の

北尾新聞店に至り配達夫となる。

かくて又も勞働生活に入るや、社會主義運動に身を投ぜんとの熱望、再び猛然として湧き來る。配達の餘暇『新社會』の他に種々社會主義に關する書籍、哲學書などを漁り、人々との議論に熱し、社會組織を呪ふ。舊知皆な僕の激變に驚愕の眼を睜はるに至れり。次いで『新社會』への投書より堺氏との文通生じ、大阪の同志(全部で僅に四名)に紹介され、會合に出席す。一方大杉、荒畑等の發行せる『近代思想』、横濱の『解放』などをも購讀し、又、大杉の名著『勞働運動の哲學』『社會的個人主義』を購ひ、同志より『青年に訴ふ』『ゼネラルストライキと經濟組織の未來』『勞働階級の戰術』等の秘密出版を借讀するに及んで、サンヂカリズムの運動に全く心を奪はれるに至れり。

大正四年(二十三歳)　堺氏との文通、及び附近諸工場への宣傳紙撒布を知られ、正月來度々刑事に見舞はる。然して此の刑事の訪問によりて、主義運動に身を投ずるの決心いよ〳〵確固となれり。間もなく主任と衝突し、去つて附近の二階を借りて俥夫となる。

されど、社會主義の學說を徹底的に研究し、運動方法を知るには是非一度上京して諸先輩に接する必要あるを痛切に感じ、三月末上京に決す。然れ共、旅費出來ねば先づ京都に至る。此處にて新聞配達をなし、幾何の金を得て更に名古屋に至りしは五月末なりしと覺ゆ。愛知新聞

主筆横田淙治郎君は我等の先輩なれば、此の人をたよる。此處にて配達主任となつて働くこと三ヶ月、その間、横田君所藏の多くのサンヂカリズム及び無政府主義に關する書籍に讀み耽りたり。

八月、横田君から東京諸先輩に對する紹介狀を貰ひ、勇んで上京す。上京後は直ちに淺草藏前内外新聞配達所に投じ、程經て、麴町區永田町に賣文社を訪ふ。九月、日本橋區濱町河岸玄米ミルク社の配達夫に轉ず。月末本郷東片町南天堂二階に同志渡邊政太郎君を訪ひ諸同志に會見す。座に村木源次郎君あり「濱町は餘りに遠し、僕今、此の附近の牛乳舍に在るが近く止すつもりなれば、君來りて働かずや」と言ふ。即ち、十月、小石川表町石渡牛乳店に轉じ、絶えず渡邊君を訪ふて諸同志と交り、議論し、多くの書籍を借讀す。十月末、玄米ミルク社に給金の殘りを貰ひに行きしが、主人言を左右にして渡さず、僕大いに激怒して亂暴を働く。依つて久松署に引致され三日後釋放されしが、それより刑事二人に尾行され石渡牛乳店に歸る。石渡主人尾行に驚いて直ちに解雇を申渡す。その夜は富坂署の道場に寢せられ、翌日渡邊君を訪ひ、食客す。

十一月上旬、同志間に何事かの劃策ありしが、新米の身の悲しさ、その仲間から除外されしを大いに憤慨し、されば、僕には僕の運動方法ありと心に決し、間もなく人夫募集人に連れられて密かに足尾銅山に入込む。足尾の人夫部屋は聞きしにまさる虐待にて、持物から衣類まで

はぎ取られ、哀れ人間一疋、四圓五十錢に賣渡されて、破小屋の中に監禁さるる身とはなりたり。坑内の虐使に堪え兼ねて逃走する者、病死する者、壓死する者、手足を折る者など續々あり。只々膽を冷すのみ也。元氣ある者は、酒と博打とダルマ（淫賣婦）の他何ものもなし。宣傳の理想みじめに打くだかれて、今は己れの命危くなりたり。如斯なれば、十二月十五日大雪の夜、友一人と語らひ、便所より脱け出し逃走す。渡良瀬に沿つて、雪を踏み、岩によぢ、翌朝漸く神戸といふ僻村に着きしが、此處にて再び捕へられ、半死半生に打たれて人夫部屋に連れ戻さる。

大正五年（二十四歳）　一月五日、病院に通ふ（落磐にて負傷）時、隙を狙つて逃げ出し、線路へ馳け入つて發車しつつある汽車に飛び乘り、種々出來事あつて後、翌日、ともかくも歸京するを得たり。

直ちに渡邊君を訪ひ、喜び迎えらる。同じ南天堂二階の一室に居りし久板卯之助と同居し、彼れが單獨發行しつつありし雜誌『勞働青年』を手傳ひ、專ら體の養生をなす。後、小石川春日町の安場の部屋に入り、市役所の道路課雇人夫となる。轉じて、神田三崎町の中村の部屋に入り、砲兵工廠兵器所の人夫となる。荒畑寒村編輯の『勞働組合』を密かに工廠内に撒布しつつありしを發見され、即時馘首さる。それより、深川富川町、淺草泪橋等の木賃宿を漂泊しつ

つ、品川驛線路工夫（雇）、芝浦製作所、東京市電氣局等の人夫をなしつつありしが、更に轉じて本郷追分町に國民新聞の配達夫となり、傍ら、渡邊政太郎君と共に平民病院の廣告を配りなどす。

當時、代議士總選擧あり、堺利彦氏試みに立候補す。僕、雇はれてその運動員となり、主としてビヲ撒きと演說會準備係とを受持ち、些か奮鬪す。これより堺利彦、高畠素之兩氏に認められ、賣文社員となる。

大正六年（二十五歳）　賣文社、京橋南鍋町より麴町有樂町に轉ず。僕、玄關番を經て賣文の手傳ひなど爲しつつ、主として堺氏に文筆のことを敎へらる。後に雜誌『新社會』の編輯を手傳ひしが、堺、山川、高畠、荒畑の諸君により、その間多く啓發さるる所ありしは勿論也。

一方、古くより渡邊君の家に開きつつありし集會の、渡邊君の慈父の如き溫情と悲壯なる奮鬪とにより、漸く堅實なる芽を發し來る。僕、これを見て、ただ賣文社にて文學の事にのみ耽る恥しさを感じ、久板君と計つて、共に日暮里の貧民町に一軒を借りて大いに活躍なさんとす。爲めに賣文社を退きしは、その年の十二月なりき。

大正七年（二十六歳）　一月一日、大杉夫妻、府下龜戸の勞働者街に移つてサンヂカリズム運

動を起す爲に、先づ平易なる勞働者のみの新聞を發行せんとす。然して、僕等の同じき企てを知つたる大杉は、共に來つて力を合はせずや、と言ひ來る。久板と共に大杉を訪ひ、語り合つて意氣相投じたれば、翌日、早速、日暮里の家をたたんで龜戸に同居す。

四月、『勞働新聞』第一號を出す。二號、三號、禁止さる。資金の道絶ゆ。七月、居を田端に移し、大杉夫妻を九州に送つて、滿腔の想ひを吐露したる第四號を最終號として發刊す。忽ち新聞紙法違反によつて起訴され、久板は五ヶ月、僕は十ヶ月の禁錮を言渡されて、東京監獄に十月入監す。

大正八年（二十七歳）　八月五日出獄。大杉夫妻、近藤憲二、中村還一、延島英一、久板卯之助等と共に本郷駒込曙町に勞働運動社を起し、十月『勞働運動』第一號を發刊す。僕、大阪に下りて大阪南區空堀町に勞働運動社支局を設く。十二月、大杉入獄。

大正九年（二十八歳）　毎月、雜誌編輯の爲め東京大阪間を往復す。二月大杉出獄。四月より『勞働運動』に關西版を設く。六月廢刊。

僕、猶大阪に止まつて運動なし、衣食の爲めに再び俥夫となる。八月末日、突如として義兄今立竹治郎姫路より支局を訪ふ。曰く「長年汝の行衞知れねば兩親の心痛一方ならず、今老衰

して姫路の阪本の離家にあり。父の餘命なく、且つ親族一同にて汝に談合もあれば、今より共に姫路に來れ」と。即ち、伴はれて姫路に至る。

父母との對面は六年振り也。僕、ただ頭を下げて一言もなし。父を見るに老ひ呆けて小兒の如し。涙下る。翌日親戚の誰れ彼れ相集り、僕を圍んで言ふ。「我々は決して汝を責めず、幼なかりし汝一人に此の二人を背負はせし我々（母の子供等にて僕の義兄に當る）にも罪あり。勿論今後とも我等にて此の二人は養はんなれど、汝も此の地に歸り、兄弟親族、共に仲よく樂しく暮さずや、汝の生活は如何樣にも相談せん」と。僕答へて云ふ。「僕の不孝の大罪は詫ぶるに言葉なく、諸子の親切溫情は厚く溢るゝばかり也。然し、社會主義は僕の生命也。之を捨てて何んの生甲斐あらんや。諸子の厚意を退くるは心痛き限りなれども、此の上は兩親を伴ふて上京せんのみ」と。其の夜、近くに住む今立に行きて寢ねしが、義姉しげ泣いて云ふやう、「父が氣の毒なれば是非歸つてくれ、母一人なれば親戚は皆な母を養ふべき義務ある者のみ故、汝居ずともよし。されど、父の身寄は全く此處にはなく、阪本にて彼の如く養はるるは如何ばかりか悲しかりなん。且つ、あれにては阪本に養子となり居る弟從藏が可哀相也」と。僕、やや暫く默して、涙を垂れて居しが、「許せよ、皆な僕のなせる罪也。誠に父は氣の毒なり。僕、親戚達の親切溫情の言には少しも心動かされず。彼等が情け心に含まる世間的な飾り氣の分子の多くを透視するに難からざれば也。しかし、父の老ひほうけたる有樣、あの、ただ小兒の如く

ニコ〳〵と嬉しげなる樣や、阪本の夫婦に對して君主に對するが如き慇懃さを見せられし時に血涙溢れて眼もくるる思ひをなしたり。あれを毎日眼前に見つつある貴女や從藏は、さぞかし心つらかるべし……あゝ、僕、社會主義運動を捨てて、一時姫路に歸り働かん。父母に侍さん。姉よ、僕心を決したり。されど、父を見送りし後は直ちに去つて元に還るべし」と。

かくて僕は、翌日その旨を親戚の人々に語り、一旦大阪に歸りて凡てを取り片附け、且つ大杉の許には長文の手紙を出して一時運動より身を退く事を述べ、四日後に姫路に歸りたり。

先づ、今立の兄に相談して、老親を阪本から其の貧家に引取り來る。翌日、老父は心嬉しければとて孫に連れられて神詣でせしが、歸り來る時、長屋の路次にて足をとられ打伏す。然るに、それより足腰立たずなりて病體となり、七日目には早や眠るが如く息絶えたり。葬式など萬端終りて後、母を今立に依賴して相州鎌倉なる大杉の家に向つて急行す。時、九月下旬。

十月中旬、大杉支那より歸る。(旅行約一ヶ月半)十二月初旬、社會主義同盟の第一回大會あり。

大正十年(二十九歳)　一月、神田北甲賀町駿臺倶樂部内に勞働運動社を設け、週刊『勞働運動』を發行す。同人は、舊同人の他に、近藤榮藏、高津正道、竹内一郎、寺田鼎など加はる。五月中頃、大杉の命を受けて近藤榮藏上海に使せしが、六月、下關にて捕はる。それに關聯せ

るボルセヰキ等の僕等に對する奸策陰謀曝露し、週刊『勞働運動』は六月を以て廢刊す。

七月下旬、單獨にて西部宣傳旅行の途に上る。直通、琉球に至り三週間ほど滯在、それより九州一圓、四國、中國を經て、九月中旬歸京。近藤憲二と共に麹町元園町元社會主義同盟本部の二階に住し、勞働運動社の再擧を準備す。

大正十一年(三十歳)　本郷駒込片町十五に勞働運動社を設け、一月より月刊『勞働運動』を發行す。同人は、大杉夫妻、近藤憲二、村木源次郎、及び僕との五人也。大杉夫妻は逗子より通ふ。五月、心中些か面白からざる事あり、且つ例の神經衰弱的の發作も伴ひて、暫時郷里に逃避を決し、同志には無斷にて突如姫路に歸る。歸郷後、今立に寄寓して某米穀取引所仲買人の帳場に勤む。六月、村木源次郎、大杉の使として來り、頻りに歸京を迫る。六月末日歸京し再び勞働運動社に投ず。大杉夫妻、亦逗子を引揚げ來りて共に生活す。

十月、大阪に開かれし、全國勞働組合總聯合協議會に出席す。そのまゝ大阪に止り、南區天王寺公園前に勞働運動社支局を設く。十二月、大杉、世界アナキスト大會出席のためフランスに渡る。

大正十二年(三十一歳)　一月、勞働運動編輯上の事に就き意見(殊に伊藤野枝君と)合はず、

且つ病身にてもありたれば、二月初め、那須溫泉に至り江口渙君にたよる。五月歸京。溫泉にて生れて初めての戀女を得、歸京後、彼女の近く(淺草千束町)に二階を借りて住み、勞働運動社と離れて雜文など書きて生活す。

七月、大杉歸國、村木源次郎、僕を淺草に呼びに來る。大杉と僕と談數刻せし後、僕「猶しばらく運動を止めて居たし」と言ふ。大杉、「さうだ。しばらく遊ぶがいゝ」とて、遊んでゐる間の生活費を支給せんといふ。僕、笑つてこれを受く。

八月中旬、僕、膀胱カタルを病み、横臥す。村木來つて「社には君の嫌ひな野枝君は居ぬ。來つて寢よ、看護せん」と言ふ。八月二十四日、村木に伴はれて勞働運動社に行き病臥す。

九月一日地震、鮮人、社會主義者、並びに大杉夫妻宗一君など虐殺さる。僕の色女は此時より行衞不明となる。後、鄕里に歸省し居りしこと判明。翌十三年五月頃、梅毒にて病死せしと聞く。

大正十三年(三十二歳)　九月一日、福田雅太郎を狙撃して果さず。捕はる。

大正十三年十一月三日手記

於東京刑務所　和田久太郎

大正十四年(三十三歳)　五月二十一日より東京地方裁判所に於て、福田雅太郎暗殺未遂事件の公判開始さる。裁判長は宇野要三郎、檢事は黑川渉にして、辯護士は山崎今朝彌、布施辰治等の諸氏なりき。檢事の求刑は死刑なりしが、九月十日、無期懲役の判決言渡しあり、控訴せず服役す。九月十九日、市ヶ谷の未決監より秋田刑務所に移さる。

昭和二年(三十五歳)　市ヶ谷刑務所で書いた隨筆、書簡、短歌、俳句等を蒐め、『獄窓から』と題し、勞働運動社より出版さる。

昭和三年(三十六歳)　二月二十日、「もろもろの惱みも消ゆる雪の風」の辭世を遺して秋田刑務所の監房で縊死す。二十二日、望月桂、近藤憲二、秋田に赴き、遺骸を荼毘に附して携へ歸る。三月二十一日、神田松本亭に勞働運動社主催の告別追悼會を開催せしが、反動團體と官憲のために蹂躙さる。

(以上編者追記)

編輯後記

本書の前篇『獄窓から』は、嘗つて和田君が福田雅太郎暗殺未遂事件の被告として市ヶ谷刑務所に收監されてゐた時に書いたもので、昭和二年三月、勞働運動社から出版したもの其儘である。そして、後篇の『孤囚漫筆』は、說明するまでもなく、無期懲役囚として秋田へ行つてからのもので、それに『略歷』を加へて一册に纏めたのである。

從つて『前篇』は、大たい和田君の希望に基いて編輯したのであつたが、『後篇』は全く編者の獨斷で取捨した。

しかし僕は、本書に於て、久太といふ多角的な人間の各方面を、可なり充分に現はし得たと信じてゐる。殊に僕は、本書に收めた書簡が、最も露骨に久太そのものを投げ出してゐると思ふ。望月福子さんに宛てたしんみりとしたもの、同志に宛てた運動上の見解と氣焰、それから彌次、皮肉、與太、フヽフンと鼻先きで笑つたところ、何れも久太の一面である。そしてその綜合が、久太そのものなのである。

ただ、秋田へ行つてからは、書簡に見られるやうに、嚴しい制限があつたので、社會問題に關するものは殆んど全く書かれてゐない。その代り、盡くることのない思ひ出に耽つたり、一

本の雜草にも言ひ知れぬ悦びを感じたり、自分の心をぢつと見詰めたりする靜かな方面は、市ケ谷時代に比して、より强く描かれてゐるではないか。

僕は今、本書の校正を急ぎつゝ、幾度びか筆を止めて、亡き同志のありし日を思ひ浮べたことであつた。或る時は微笑みを以て、或る時は全身の血の逆流するのを感じながら。

和田君の死後既に一ヶ年半を經過した今日、やうやく本書を出版することが出來て、兎も角も一種の安堵を覺えるのである。しかしながら、この久しきに亙つて本書を完成し得なかつた僕の怠慢を、同志諸君、及び和田君に親しみを持つてゐて下さる多くの人達に對し、幾重にもお詫びして置かなければならない。

一九三〇年八月

近藤憲二

改造文庫　第二部　第百六十二編
獄窓から　定價五十錢
（兩角製本）

著者　和田久太郎
編者　近藤憲二
發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇
印刷者　君島潔　東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

版權所有

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(34)自一一二一番至一一二四番

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國内を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無産階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して茲に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。
□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著 刊近
第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著 刊近
第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著 刊近
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著 刊近
第五篇 經濟學原理 デヰド・リカアド著 刊近
第六篇 經濟學原理(上卷) スチユアト・ミル著 刊近
第七篇 經濟學原理(下卷) スチユアト・ミル著 刊近
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著 刊近
第九篇 經濟學原理 ヂエボンス著 刊近
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彦譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 木莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會(上卷) モルガン著 刊近
第一七篇 古代社會(下卷) モルガン著 刊近
第一八篇 エミール(上卷) ルソー著 内山賢次譯 4
第一九篇 エミール(下卷) ルソー著 内山賢次譯 4
第二〇篇 國家論 オツペンハイマー著 廣島定吉譯 2
第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著 4
第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著 2
第二三篇 日本經濟論 田口卯吉著 1
第二四篇 日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 瀧本誠一著 2
第二五篇 日本商業史 横井時冬著 4
第二六篇 日本工業史 横井時冬著 4
第二七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2
第二八篇 リツケルト論文集 リツケルト著 2

第二九篇 フッサール論文集 フッサール著 (近刊)
第三〇篇 女工哀史 細井和喜蔵著 4
第三一篇 婦人解放論 スチュアト・ミル著 (近刊)
第三二篇 社會進化と婦人の地位 ラッパポート著 山川菊榮譯 2
第三三篇 共産主義小兒病 レーニン著 (近刊)
第三四篇 二十世紀初頭の農村問題 レーニン著 (近刊)
第三五篇 文學と革命 トロツキー著 (近刊)
第三六篇 幸德秋水集 幸德秋水著 2
第三七篇 中江兆民集 中江兆民著 2
第三八篇 財産起源論 レヴインスキー著 貴島克巳譯 1
第三九篇 組織論 鈴木レーニン著 厚譯 3
第四〇篇 三民主義 孫文著 金井寛三譯 3
第四一篇 唯一者とその所有 マックス・スティルネル著 辻潤譯 6
第四二篇 世事見聞錄 武陽隱士著 木庄榮治郎校訂 (近刊)
第四三篇 金融資本論 全譯 ヒルファディング著 林要譯 7
第四四篇 封建社會の研究 近世 木庄榮治郎著 2
第四五篇 我國近世の農村問題 木庄榮治郎著 3
第四六篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論 (上卷) ハインリッヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯 (近刊)
第四七篇 マルクスの歴史、社會並に國家理論 (下卷) ハインリッヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯 7
第四八篇 國家觀 マルキシズム マックス・アドラー著 山本琴譯 5
第四九篇 主義經濟學 マルクス 河上肇著 3
第五〇篇 哲學概說 桑木嚴翼著 3
第五一篇 現代哲學思潮 桑木嚴翼著 3
第五八篇 天才論 ロンブロオゾオ 辻潤譯 5
第五九篇 政治心理學 オーラズ著 板倉進譯 (近刊)
第六〇篇 唯物史觀概說 ゴルテル著 堺利彦譯 (近刊)
第六一篇 無政府主義と社會主義 プレカアノフ著 百瀬二郎譯 2
第六二篇 財産進化論 ラフワルグ著 荒畑寒村譯 2
第六三篇 帝國主義論 レーニン著 岡田宗司譯 (近刊)
第六四篇 帝國主義論 ホブソン著 石澤新二譯 5
第六五篇 勞働價値說の擁護 ヒルファディング著 塚木三吉譯 2
第六六篇 經濟地理概論 プレブス・リーゲ編 菊川忠雄譯 3

第六八篇 プレブス經濟學 プレブス・リーゲ編 田所輝明譯 3
第七〇篇 社會意識學概論 ボグダーノフ著 林房雄譯 4
第七一篇 經濟科學概論 ボグダーノフ著 林房雄 木村恭一譯 5
第七六篇 倫理と唯物史觀 カール・カウツキー著 堺利彦譯 2
第七七篇 社會進化と生物進化 アーサーリュキス著 荒畑寒村譯 2
第七九篇 唯物論と經驗批判論 (上) レーニン著 山川・大森譯 (近刊)
第八〇篇 唯物論と經驗批判論 (下) レーニン著 山川・大森譯 (近刊)
第一〇五篇 エルフエルト綱領解說 カール・カウツキー著 三輪壽壯譯 3
第一〇六篇 マルクス經濟學大綱 ボルハルト著 田中九一譯 2

—以下續刊—

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記 澤瀉久孝校訂 (刊近)
第二篇 萬葉集(上卷) 折口信夫校訂 (刊近)
第三篇 萬葉集(下卷) 折口信夫校訂 (刊近)
第四篇 古今集 吉澤義則校註 (刊近)
第五篇 新古今集 吉澤義則校註 (刊近)
第六篇 新編 源氏物語(上卷) 折口信夫校註 (刊近)
第七篇 新編 源氏物語(下卷) 折口信夫校註 (刊近)
第八篇 枕草紙 山岸德平校訂 (刊近)
第九篇 金槐集 幸田露伴校註 (刊近)
第一〇篇 平家物語 (刊近)
第一一篇 雨月物語 山口剛校訂 (刊近)
第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註 (刊近)
第一三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校訂 3
第一四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂 3
第一五篇 伊勢物語 久松潛一校訂 2
第一六篇 神皇正統記 宮地直一校註 3
第一七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂 3
第一八篇 心中天の網島 曾根崎心中 女殺油地獄 黑木勘藏校註 3
第一九篇 冥途飛脚 黑木勘藏校註 (刊近)
第二〇篇 國姓爺合戰 黑木勘藏校註 (刊近)
第二一篇 槍權三重帷子 夕霧阿波鳴門 黑木勘藏校註 (刊近)
第二二篇 心中重井筒 丹波與作 黑木勘藏校註 (刊近)
第二三篇 山崎與次兵衛壽門松、心中宵庚申 黑木勘藏校註 (刊近)
第二四篇 傾城反魂香 黑木勘藏校註 (刊近)
第二五篇 淀鯉出世瀧德長町女腹切 黑木勘藏校註 (刊近)
第二六篇 堀川波鼓 博多小女郎波枕 黑木勘藏校註 (刊近)
第二七篇 五十年忌歌念佛 大經師昔暦 黑木勘藏校註 (刊近)
第二八篇 菅原傳受手習鑑 假名手本忠臣藏 黑木勘藏校註 (刊近)
第二九篇 八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り 黑木勘藏校註 (刊近)
第三〇篇 伊賀越道中双六 一谷嫩軍記 黑木勘藏校註 (刊近)
第三一篇 大鏡 吉澤義則校註 (刊近)
第三二篇 徒然草 吉澤義則校註 (刊近)
第三三篇 日蓮上人集 (刊近)
第三四篇 親鸞上人集 (刊近)
第三五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 1
第三六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 1
第三七篇 平凡 二葉亭主人著 1
第三八篇 子規俳話 正岡子規著 3
第三九篇 子規歌話 正岡子規著 (刊近)
第四〇篇 坊つちやん 夏目漱石著 2
第四一篇 草枕 夏目漱石著 2
第四二篇 それから 夏目漱石著 3
第四三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 2
第四四篇 我等の一團と彼 雲は天才である 石川啄木著 1
第四五篇 山陰土產その他 島崎藤村著 2
第四六篇 民謠集 作曲 白秋 北原白秋著 2
第四七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著 神近市子譯 2
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 横光利一著 1
第五〇篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング ジャック・ロンドン著 堺利彥譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著 3
第五五篇 自選歌集 朝の螢 齋藤茂吉著 2
第五六篇 自選歌集 十年 島木赤彥著 2
第五七篇 自選歌集 川のほとり 古泉千樫著 2
第五八篇 自選歌集 松の芽 中村憲吉著 2

第五九篇 自選歌集 海やまのあひだ 釋迦空著 4
第六〇篇 自選歌集 立春 木下利玄著 2
第六一篇 自選歌集 樫花 北原白秋著 3
第六二篇 自選歌集 人間往來 與謝野晶子著 2
第六三篇 自選歌集 槻の木 窪田空穂著 2
第六四篇 自選歌集 野原の郭公 若山牧水著 2
第六五篇 自選歌集 原生林 前田夕暮著 3
第六六篇 自選歌集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2
第六七篇 白秋作曲 童謡集 北原白秋著 2
第六八篇 白秋作曲 國民歌謡集 北原白秋著 2
第六九篇 白秋作曲 舞踊詞集 北原白秋著 2
第七〇篇 背德者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 2
第七一篇 チェホフ書簡集 内山賢次譯 5
第七六篇 愚庵歌集 齋藤茂吉編 刊近
第七七篇 芭蕉遺語集 荻原井泉水校訂 刊近
第七八篇 七番日記（上卷） 荻原井泉水校訂 刊近
第七九篇 七番日記（下卷） 荻原井泉水校訂 刊近
第八〇篇 おらが春 荻原井泉水校訂 刊近
第八二篇 新花つみ（蘇村日記） 荻原井泉水編 刊近
第八八篇 寡婦マルタ エリイヂ・オルセシコ著 清見陸郎譯 3
第八九篇 句集虚子 高濱虚子著 6
第九〇篇 井泉水句集 荻原井泉水著 5
第九一篇 サニン アルツイバーセフ著 武林無想庵譯 6
第九二篇 一青年の告白 ジョージ・ムーア著 辻潤譯 3
第九三篇 一週間 リベディンスキー著 池谷信三郎譯 2
第九四篇 室生犀星詩集 室生犀星著 5
第九五篇 千家元麿詩集 千家元麿著 3
第九六篇 横瀬夜雨詩集 横瀬夜雨著 5
第九七篇 修禪寺物語 岡本綺堂著 3
第九八篇 少年の悲哀 國木田獨歩著 2
第九九篇 運命論者 國木田獨歩著 2
第一〇〇篇 愛慾 武者小路實篤著 2

第一〇五篇 佛蘭西家庭童話集（第一卷） ボーモン夫人著 長松英一譯 3
第一〇六篇 佛蘭西家庭童話集（第二卷） ドルノア夫人著 長松英一譯 5
第一一〇篇 巴里の憂鬱 シャルル・ボオドレエル著 三好達治譯 2
第一一一篇 死の舞踏 ストリンドベリイ著 山本有三譯 2
第一一三篇 奈落の人々 ジャック・ロンドン著 和氣律次郎譯 3
第一一四篇 爭鬪 ジョン・コルスワオイシ著 和氣律次郎譯 2
第一一五篇 無名作家の日記（他廿三篇 短篇小說篇 現代物1） 菊池寛 5
第一一六篇 出世（他廿七篇 短篇小說篇 現代物2） 菊池寛 4
第一一七篇 恩讐の彼方に（他廿八篇 短篇小說篇 時代物） 菊池寛 5
第一一八篇 噂の發生（他廿六篇 短篇小說集補遺） 菊池寛 4
第一一九篇 父歸る（他廿三篇 戯曲篇 現代物） 菊池寛 5
第一二〇篇 藤十郎の戀（他十九篇 戯曲篇 時代物） 菊池寛 5
第一二一篇 眞珠夫人 菊池寛 6
第一二二篇 慈悲心鳥 菊池寛 4
第一二三篇 新珠 菊池寛 5
第一二四篇 火華 菊池寛 4
第一二五篇 受難華 菊池寛 5
第一二六篇 赤い白鳥 菊池寛 3
第一二七篇 明眸禍 菊池寛 5
第一二八篇 新女性鑑 菊池寛 3
第一二九篇 陸の人魚 菊池寛 4
第一三〇篇 第二の接吻 菊池寛 3
第一三一篇 東京行進曲 菊池寛 3
第一三二篇 結婚二重奏 菊池寛 3
第一三三篇 不壞の白珠 菊池寛 3
（以上十九篇にて菊池寛全著作集完結）
第一四二篇 イブセン全集（一） 河野義雄譯 小永田衞吉譯 融 3
第一四五篇 イブセン全集（二） 大山廣光譯 中村吉藏譯 5
第一五一篇 ハイネ詩集（1） ハイネ著 生田春月譯 刊近
第一五二篇 ハイネ詩集（2） ハイネ著 生田春月譯 刊近

第一五三篇　ハイネ詩集（3）　ハイネ著　生田春月譯（近刊）

第一五四篇　洋服箪笥　トーマス・マン著　六笠武生譯　2

第一五五篇　今戸心中　廣津柳浪著（近刊）

第一五六篇　嬰兒殺し　山木有三著　3

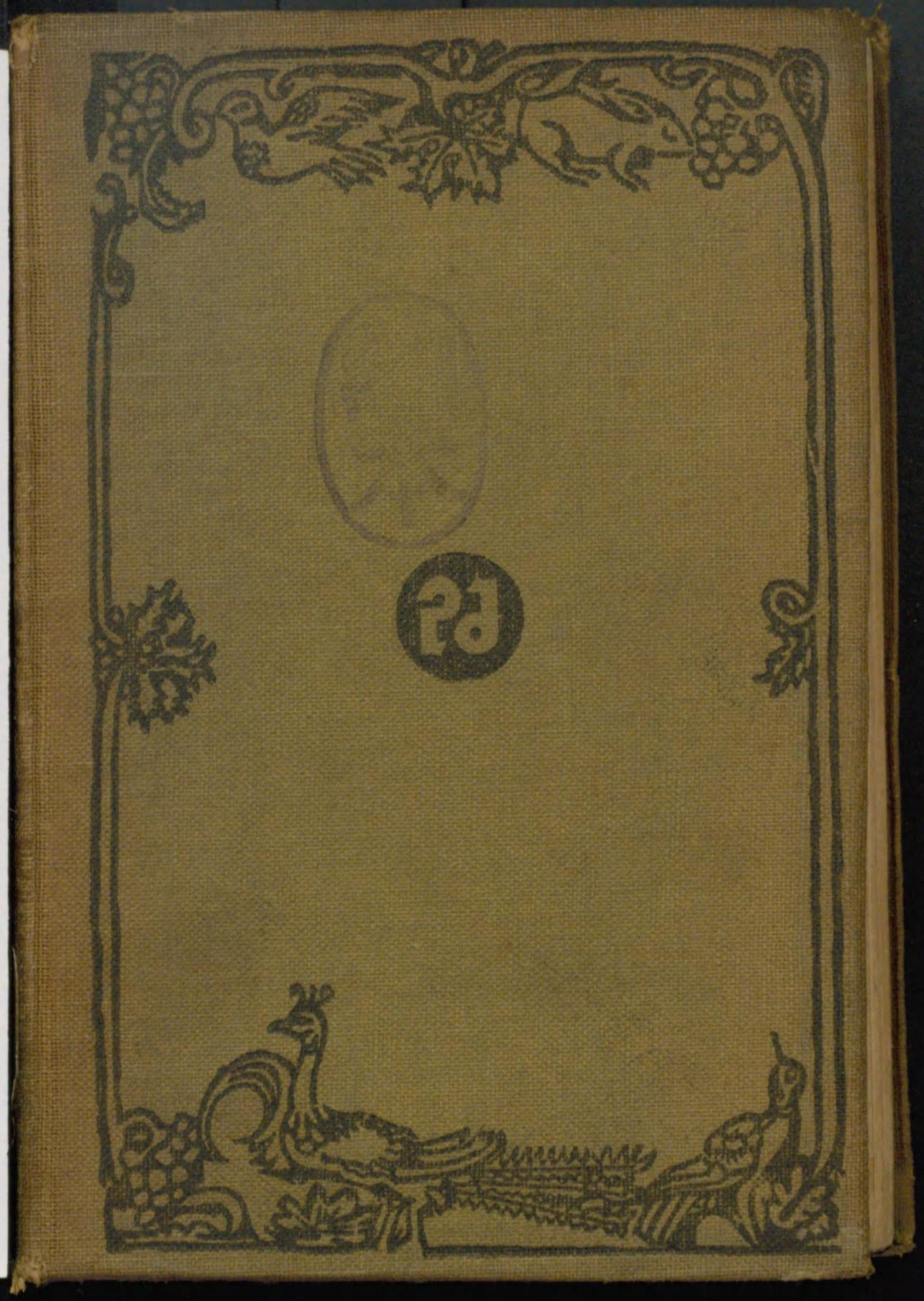
第一五七篇　芭蕉・夜船・草の詩　吉田絃二郎著　3

第一六〇篇　シラー詩集　小栗孝則著　4

第一六一篇　どつこいおいらは生きてゐる！　エルンスト・トラア著　瀬木慎譯　2

——以下續刊——

569
142



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black